

Ⅱ．黒部川本流

1. 黒部川 — 記録を前にして —

くろべ　遙かなる郷愁の黒部

平の渡しより赤牛の彼方源流を仰ぐとき、そして毛勝の乗越に立って小黒部本谷の源頭を目指すとき、黒部の広さ、大きさ、深さが、母の如く父の如く、心に故郷を恋う思いとなって、ひたひたと寄せてくる。

私達が黒部に入りつつけるのは、山々の喧騒を逃れ、真に自然なる山の氣にふれることにあると思う。初めての谷に入ってゆく。神秘にみちた、おどそかで、おそろしく、そして清々しい。人が未知への本能を充足させるあのよろこびは、いつの日もたとえようもない、山のよろこびである。

大空に浮ぶ源流を求めて、広い河原をつめてゆくあの気の遠くなるような遠さ、いよいよ迫りくる廊下帯に轟く流音、ザイルを結び合う緊張した心、ハーケンを響かせもはや攀じることのみに集中する孤独のひととき、只々前進あるのみあの高捲きの腕の疲れ、シュルンドを跳びピッケルを振るい、雪上を渡る冷たい風、踏み跡すらないお花畑、あの輝やかしいよろこびの一步一步、来し方を振りかえればもはや手のとどかぬ心の山としての谷、それらの喜びにまして楽しきは谷に焚火を囲む友との語らい……………。

黒部よ、更に広く、大きく、深くあってほしい。